

日常生活における音楽聴取行動と聴取傾向

吉村奈緒・宮谷真人

Behavior and tendency of music listening in everyday life

Nao Yoshimura, Makoto Miyatani

本研究の目的は、Sloboda (1999) で示唆された、日常生活での音楽聴取行動の背後にあると考えられる音楽聴取傾向を量的に測定し、その特徴を記述することであった。大学生 808 名を対象に調査を行った結果、聴取傾向には気分優位的聴取傾向と活動随伴的聴取傾向が存在すること、それらの聴取傾向は相対するものではなく、同一個人内に 2 つの傾向が存在し、それぞれの程度の違いが音楽聴取行動に関する個人差を生じるということが示唆された。また、2 つの聴取傾向は、音楽の聞き方や聴取時の状態との関連の強さに違いがあることがわかった。

キーワード：日常生活、音楽聴取行動、聴取傾向

問題と目的

我々が普段音楽を聞く場面は様々であるが、自らの意思で音楽を聞く場合には、例えば、「気分が沈んでいるので、気分を良くするために音楽を聞こう」とか、「作業をするのに、何か音楽をかけよう」というように、何らかの目的や動機を持って音楽を聞くことが多い。そのような個々の聴取行動に対する動機や目的は、聴取者のその時の状況や心理状態によりさまざまであろう。しかし、特定の個人についてみれば、何らかの活動が契機となって音楽を聞くことが多い人、気分の変化や維持を求めて音楽を聞くことが多い人というように、音楽聴取そのものに対する一貫した目的や動機もまた存在するのではないだろうか。本研究では、そのような音楽聴取に対する一貫した目的や動機を音楽聴取傾向と呼ぶ。

ところで、上記のような音楽聴取行動は日常生活の中で行われることがほとんどである。音楽聴取に関する心理学的研究では、実験的環境において聴取とそれに伴う反応を検討するものが多い。その一方で、我々が音楽と接する最も一般的な文脈は日常である (Sloboda & O'Neill, 2001) といえる。日常生活での音楽聴取は、例えば、実験的環境における聴取のように実験者が選択した音楽を一曲、もしくは数曲聞くという限られた状況での聴取ではなく、聴取者が、必要や目的に応じて、いつ、どのような曲を、何のために聞くのかということを選択しているのである (Sloboda, 1999)。つまり、本来音楽聴取とは文脈的なものなのである (Sloboda, 1999)。そして、近年、そのような音楽を聞く際の文脈が注目されており、日常生活での音楽聴取を扱った研究が行われてい

る (e.g. Sloboda, O'Neill, & Ivaldi, 2001). そのような研究のひとつとして、Sloboda (1999) がある。この研究では、イギリスで行われた日常生活と音楽に関する世論調査の結果を分析している。調査の内容は、日常生活における音楽の聴取方法 (音楽聴取が特定の時間、場所、活動、気分などに関連しているか) について尋ねるものであり、調査対象は自由記述で答えることが求められた。分析の対象となった 40 代から 60 代までの 76 名の記述を分類したところ、日常生活では、音楽を、リラックスや気分を高めるというように、主に気分の面に焦点を当てて聴取する場合と、家事やデスクワークといった、何らかの活動とともに聴取する場合の 2 つがあることが示された。つまり、日常生活での個々の音楽聴取行動から、その背景となる聴取傾向の存在が示唆されるものであった。

Sloboda (1999) の研究は、自由記述の分類から 2 つの異なる聴取傾向を推測しており、それを量的に表現することができないため、2 つの聴取傾向の関連性や、それぞれの聴取傾向と日常的音楽聴取行動との関係について十分に検討することはできない。そこで本研究では、Sloboda (1999) を一歩進め、日常の聴取行動に関する質問紙を作成し、その背後に存在する音楽聴取傾向を量的に測定することを目的とした。また、個人の音楽の聞き方や聴取時の状態、音楽聴取に対する態度、聴取以外の音楽行動に対する興味や態度などが、測定された音楽聴取傾向とどのように関連するかについても検討した。

方法

予備調査

Sloboda (1999) で報告されたものの他に、できるだけ広範な日常生活での聴取行動を反映させた質問紙を作成するために、広島大学教育学部および教育学研究科の大学生、大学院生 15 名 (男性 7 名、女性 8 名、年齢 18-35 歳) を対象に、自由記述式の予備調査を実施し、日常生活で行われている音楽聴取行動を収集した。質問の内容は、日常生活において音楽を聴取しようとする状況や気分、方法について尋ねるものであった。調査の結果、130 の記述が得られた。その中から Sloboda (1999) と内容が重複しない記述を、質問項目として追加した。

本調査

調査対象 広島県内の私立大学生 808 名であった。そのうち、聴取傾向を測定する項目について完全回答を行った 702 名 (男性 386 名、女性 316 名、18-49 歳) を、分析の対象とした。

質問紙 ①聴取傾向の測定: Sloboda (1999) 及び予備調査の結果を参考に作成した、日常生活における音楽の使用目的や聴取場面に関する 44 項目の記述を使用した (一部を Table 1 に示す)。調査対象は、これらの項目が示す目的や場面において、どの程度音楽を聴取することがあるかを、全くない (1 点) ~いつもある (5 点) の 5 段階で評定した。

②音楽の聞き方、聴取時の状態の測定: Lehmann (1997)、石川・岡本・戸口・山中・山本 (1985)、岩城・田中・堀 (1999) を参考に、音楽の聞き方や聴取中の状態について、9 項目を作成した (Table 2)。調査対象は、音楽聴取時にこれらの項目が示す内容について、そのようなことがどの程度あるかを、全くない (1 点) ~いつもある (5 点) の 5 段階で評定した。

③音楽聴取への態度：石川他（1985）を参考に、3項目を作成した（Table 3）。音楽聴取に対する好き嫌いの程度や、音楽の好みに対する考えについて、それぞれの項目に対応する4段階（音楽聴取に対する好き嫌いの程度であれば、全く好きではない：1点～とても好きである：4点）で評定した。

④1日の音楽聴取時間：1日のうちで音楽を聴取する時間がどのくらいあるかを a) 音楽を聞くことのみ集中している時間、b) ほかにことをしながら聞く時間の2つに分けて、それぞれ、具体的な時間数を記述した。

⑤音楽聴取に使用するメディア：音楽を聞くときのメディア（テレビ、ラジオ、CD など）について、それぞれのメディアごとにどの程度利用することがあるかを、全くない（1点）～いつももある（5点）の5段階で評定した（Table 6）。

⑥音楽的経験の有無：現在及び過去の音楽的経験の有無について、「はい」か「いいえ」で回答し、「はい」と答えた対象はその具体的内容について自由記述を行った（Table 7）。

⑦音楽行動全般に対する興味、態度：石川他（1985）を参考に8項目を作成した（Table 8）。調査対象は各質問項目が示す内容について、全くない（1点）～よくある（4点）の4段階で評定した。

手続き 授業時間を利用し、集団で行った。

結果と考察

音楽聴取傾向の抽出

44の質問項目の評定値について、主因子法、バリマックス回転による因子分析を行った。固有値1.00以上の基準によって因子数の決定を行った結果、3因子解が得られた。しかし、因子3は弱小（1.04）かつほかの因子と比較して項目数が少なかったため、2因子解を採用し、その結果全体の分散の84.9%を説明する2因子34項目が抽出された。Table 1に調査で用いた質問項目および因子分析の結果と、各因子の信頼性係数（Chronbachの α ）を示す。因子1は、「元気がないとき」、「前向きな気分になりたいとき」など、気分状態に応じて、または気分変化を目的として音楽を聴取する傾向が反映されているため、気分優位的聴取傾向と命名した。因子2は「家事をしているとき」、「公共の乗り物で移動をしているとき」などの項目が含まれ、活動随伴的聴取傾向と命名した。この因子は何らかの活動中に音楽を聴取しようとする傾向を反映している。 α 係数は.78から.96であり、各因子内の内的整合性は高いと思われる。

次に、各聴取傾向を構成する項目の得点を合計したものを項目数で割り、個人の各聴取傾向の得点を算出した。聴取傾向間の関係を見るために、ピアソンの相関係数を算出した。その結果、気分優位的聴取傾向と活動随伴的聴取傾向の間には、.617という比較的強い正の相関関係があった。このことは、気分優位的（活動随伴的）聴取傾向の高い個人は、同時に活動随伴的（気分優位的）聴取傾向も高い場合が多いということを示しており、また、その反対に気分優位的（活動随伴的）聴取傾向が低い個人は活動随伴的（気分優位的）聴取傾向も低い場合が多いということを示している。

といえる。この結果を、日常生活における聴取場面に当てはめて考えると、例えば、「勉強をする気になかなかならないので、音楽を聞くことで少しでも気分を盛り上げてやろう」というような場合が想定できる。つまり、気分と行動の両方が音楽聴取と深く関連している場合もあるであろう。Sloboda (1999)においても、「帰宅後に仕事の疲れを取るために音楽を聞いた」などというように、行動的・状況的側面と心理的機能が結びついた記述がいくつかみられている。

Table 1 音楽聴取傾向の測定に使用した質問項目の一部と因子分析の結果

項 目	因子1	因子2	共通性
因子1 気分優位的聴取傾向 ($\alpha = .960$)			
7 元気がないとき	.811	.159	.683
22 前向きな気分になりたいとき	.811	.173	.688
12 やる気を出したいとき	.794	.228	.682
14 落ち込んでいるとき	.767	.146	.609
15 元気を出したいとき	.757	.204	.615
29 気分を高揚させたいとき	.752	.228	.617
28 寂しい気分のとき	.724	.234	.580
15 気分をすっきりさせたいとき	.711	.288	.588
6 気分がのらないとき	.707	.269	.572
34 楽しい気分のとき	.683	.300	.576
1 わくわくしているとき	.673	.328	.560
27 気分を変えたいとき	.670	.254	.513
18 気分を落ち着かせたいとき	.665	.252	.505
23 勢いが欲しいとき	.660	.257	.500
5 落ち着いた気分のとき	.650	.347	.542
16 いらいらしているとき	.620	.227	.430
31 疲れているとき	.596	.273	.430
13 気分が盛り上がっているとき	.587	.318	.446
4 気分が良いとき	.571	.342	.443
10 リラックスしたいとき	.563	.279	.395
20 泣きたい気分のとき	.559	.155	.336
24 部屋が静かで音がないと寂しく感じられるとき	.531	.295	.369
19 気持ちに余裕があるとき	.499	.320	.352
33 眠気を覚ましたいとき	.478	.343	.346
因子2 活動随伴的聴取傾向 ($\alpha = .775$)			
21 外を歩いているとき	.073	.587	.349
11 家事をしているとき	.155	.522	.296
3 公共の乗り物で移動しているとき	.020	.499	.249
2 単純作業をしているとき	.374	.462	.353
30 外出の準備をしているとき	.357	.443	.324
32 インターネットをしているとき	.140	.436	.210
25 勉強をしているとき	.222	.406	.215
9 食事をしているとき	.263	.402	.231
26 読書をしているとき(学業に関連しないもの)	.266	.400	.231
8 起きるとき	.248	.393	.216
固有値	13.799	1.428	
因子寄与	11.229	3.821	

各音楽聴取傾向の特徴

気分優位的聴取傾向と活動随伴的聴取傾向のそれぞれが、どのような特徴を持っているかを検討するために、質問紙②～⑦の各項目と各聴取傾向の関係について調べた。

1. 音楽の聞き方、聴取時の状態との関係

質問②の各項目の得点と各聴取傾向の得点との相関係数を算出した。その結果、ほとんどの項目において各聴取傾向と中程度の相関関係があった (Table 2)。しかし、相関係数に関する有意性検定を行った結果、多くの項目で気分優位的聴取傾向のほうが、活動随伴的な聴取傾向に比べ、相関係数が有意に大きかった (網掛けをしている箇所)。質問紙②の各項目は、音楽をどのように聞いているか、もしくは聞いているときにどのような状態になるかということに関連する項目である。こ

これらの項目は、音楽をどの程度集中して聞いているかということや、聴取時の音楽への没入の程度を反映している項目であるといえる。従って、この結果は、活動随伴的聴取傾向に比べ、気分優位的聴取傾向が、音楽聴取時に音楽を聞くことに集中し、音楽に没入することとより強く関連することを表している。

Table 2 音楽の聞き方、聴取時の状態と音楽聴取傾向との関係

質問項目	気分優位的聴取傾向	活動随伴的聴取傾向
音楽を聞いているときに音楽の持つ世界と一体感を感じる	.428**	.264**
音楽を聞いていると、別世界に飛んでいくような感じや夢を見ているような気分になる	.381**	.205**
音楽を聞いていると音楽に守られているような気分になる	.334**	.162**
音楽を聞く時には、その作品がどのような気分や感じを表現しているか、注意を払っている	.291**	.260**
音楽を聞いている視覚的なものをイメージすることがある	.371**	.284**
音楽を聞くときは音楽を聞くことだけに集中している	.180**	.096*
音楽は軽く聞き流している	-.036	-.052
曲の構造や楽器の音に注意して音楽を聞くことがある	.316**	.298**
音楽を聞いているうちに我を忘れてしまうことがある	.359**	.258**

数字は、ピアソンの積率相関係数, ** $p < .01$ * $p < .05$

注) 相関の差の有意性検定の結果、活動随伴的聴取傾向に比べて有意に ($p < .01$) 大きいものに網掛けをした。

2. 音楽聴取に対する態度との関係

質問③の各項目に対する回答を集計して、Table 3 に示した。数字は、各選択肢を選んだ調査対象者の人数の割合である。調査対象の多くが音楽聴取を好み、音楽と多くの接触を求めているため、日常的に音楽を聞く機会が多いといえる。しかし、音楽の好みにうるさいと答える人数はあまり多くなく、聴取音楽へのこだわりは特にないようである。このような音楽聴取に対する態度と聴取傾向との関連について、各項目の得点と聴取傾向の得点との間のピアソンの相関係数を算出して検討した。その結果、気分優位的聴取傾向、活動随伴的聴取傾向ともに質問③の各項目との相関関係は認められなかった (Table 4)。従って、それぞれの聴取傾向と、音楽聴取に対する好き嫌いやこだわりの程度といった、音楽聴取に関する態度の間には特に関連がないものと思われる。

Table 3 音楽聴取に対する態度に関する回答 (%)

質問項目	あなたは音楽を聞くことが好きですか	あなたはたえず音楽と触れ合っていたいと思いますか	あなたは音楽の好みにうるさい方ですか
回答の割合	1 まったく好きではない (1)	1 まったくそう思わない (1)	1 まったくうるさくない (5)
	2 あまり好きではない (2)	2 あまりそう思わない (21)	2 あまりうるさくない (51)
	3 わりに好きである (33)	3 わりにそう思う (47)	3 わりにうるさい (33)
	4 とても好きである (66)	4 とてもそう思う (31)	4 とてもうるさい (11)

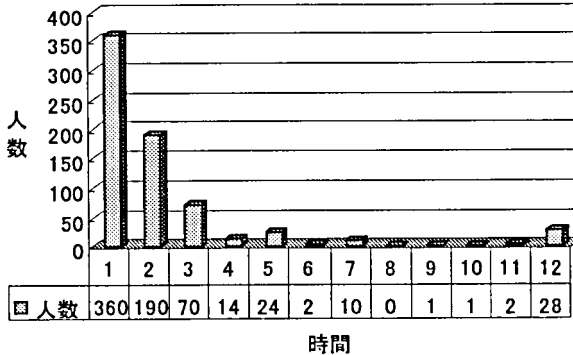
Table 4 音楽聴取に対する態度と各聴取傾向との関係（ピアソンの相関係数）

質問項目	気分優位の聴取傾向	活動随伴的聴取傾向
あなたは音楽を聞くことが好きですか	.005	-.013
あなたはたえず音楽と触れ合っていたいと思いますか	-.001	.034
あなたは音楽の好みにはうるさい方ですか	.020	.035

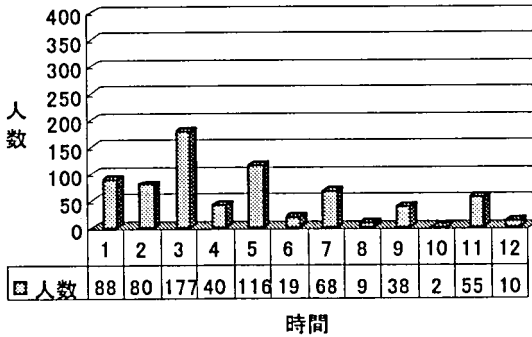
3. 音楽聴取時間との関係

一日の音楽聴取時間を30分毎に区分して得点化し（30分未満：1点、30分～1時間：2点、1時間～1時間半：3点、1時間半～2時間：4点、2時間～2時間半：5点、2時間半～3時間：6点、3時間～3時間半：7点、3時間半～4時間：8点、4時間～4時間半：9点、4時間半～5時間：10点、5時間以上：11点）、得点ごとに人数を集計した（Figure 1）。結果より、全体的に音楽を集中して聞く時間は短い、何かをしながら聞く時間はそれと比べると長く、また、個人差が大きいことがわかる。次に、それぞれの聴取時間と聴取傾向との関連について、ピアソンの相関係数を算出して調べた（Table 5）。その結果、どちらの聴取時間についても聴取傾向とは無相関であり、聴取時間の長さや聴取傾向の間に関連性は見出せなかった。

a) 音楽を聞くことだけに集中している時間



b) ほかにのこをしながら音楽を聞く時間



注) グラフ中の「12」は無回答を表す

Figure 1. 一日の音楽の聴取時間

Table 5 一日の音楽聴取時間と各聴取傾向との関係 (ピアソンの相関係数)

聴取時間	気分優位的聴取傾向	活動随伴的聴取傾向
音楽を聞くことに集中している時間	.014	.006
ほかの事をしながら聞く時間	-.008	-.006

4. 各聴取傾向とメディア利用状況の関係

調査対象がそれぞれのメディアをどの程度利用するかについて、メディアごとに評定値の平均を算出し、比較した (Figure 2). その結果、CD、次いでMDの利用が最も高いことが示された. 次に、それらの利用状況と各聴取傾向の関連について、ピアソンの相関係数を算出して検討した (Table 6). その結果、それぞれのメディアの利用頻度と各聴取傾向の間には関連がみられなかった.

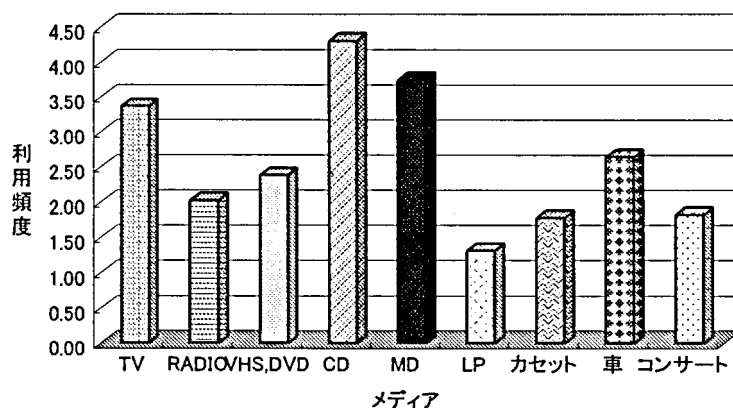


Figure 2. 各メディアの利用状況 (利用頻度は各メディアにおける評定値の平均)

Table 6 音楽聴取時の各メディアの利用と各聴取傾向との関係 (ピアソンの相関係数)

使用メディア	気分優位的聴取傾向	活動随伴的聴取傾向
テレビ番組	-.000	.014
ラジオ番組	-.011	.005
音楽ビデオ, DVD	-.003	.022
CD	-.010	-.017
MD	.001	-.005
LP	-.022	.027
カセットテープ	-.003	.038
カーオーディオ	.002	.011
コンサート	.004	.022

5. 音楽経験との関係

調査対象者の音楽的経験の有無を項目ごとに集計した (Table 7). 次に、「これまでに音楽に関連した習い事をしてきたことがある」に対する回答を音楽的経験の有無に関する基準として、音

乐的経験のある対象者とない対象者との間で、各聴取傾向の得点に違いがみられるかどうかを検討した。この質問項目のみを用いた理由は、以下の2つである。第1に、この質問に対する回答は、経験のある人とない人の人数がほぼ同数であったことである。第2にこの質問の理解に、調査対象によるばらつきが少ないことである。本研究では音楽的経験を、実技的なものや専門的なものを含む調査対象の個人的な経験として考えていた。従って、例えば、「これまでに学校(中学・高校も含む)で音楽に関連した活動をしていたことがある」に対する「経験あり」回答の具体的な内容としては、合唱部や吹奏楽部などでの活動を想定していた。しかし、回答の中には、「音楽の授業」や「音楽の授業のリコーダー」といった記述もあり、質問項目によっては、音楽的経験に関する理解の仕方が、調査対象間で異なっていたと考えられる。

各聴取傾向得点に関する t 検定の結果、気分優位的聴取傾向(経験群:3.18, 非経験群:3.14)、活動随伴的聴取傾向(経験群:2.39, 非経験群:2.45)ともに音楽的経験の有無による得点に違いはなく、聴取傾向と音楽的経験の有無には関連がないことが示唆された。

Table 7 現在および過去の音楽的経験に関する質問項目と回答者数(人数)

質問項目	はい	いいえ
現在、音楽に関連した習い事をしている	42	657
現在、学校で音楽に関連した活動をしている	49	648
現在、上記以外で音楽に関連した活動をしている	55	643
これまでに音楽に関連した習い事をしていたことがある	343	354
これまでに学校(中学・高校)で音楽に関連した活動をしていたことがある	231	468
これまでに上記以外で、音楽に関連した習い事をしていたことがある	57	633

6. 音楽行動全般に対する興味、態度との関係

調査対象が聴取以外の音楽行動をどの程度行うかについて、項目ごとに評定値を集計した(Table 8)。結果からは、カラオケの利用度は非常に高く、好きな音楽ジャンルの探索的行動も多く見られるが、「音楽に関する書籍を読む」、「好きなアーティストや作曲家について調べる」など、知識を深めようとするような、音楽に対する知識追求的な態度があまりないことが推測される。次に、これらの行動と各聴取傾向との関係を、ピアソンの相関係数によって分析した。その結果、気分優位的聴取傾向、活動随伴的聴取傾向ともに各質問項目との有意な相関関係は認められなかった(Table 9)。従って、各聴取傾向と、聴取以外の音楽行動に対する興味、態度の間には特に関連がないといえる。

Table 8 音楽行動全般に対する興味、態度に関する項目と評定値の集計(人数)

質問項目	全くない	たまにある	ときどきある	よくある
カラオケで歌う	71	202	199	228
家で楽器の練習をする	446	135	52	66
家で歌の練習をする	275	224	125	76
音楽に関する書籍を読む	356	212	40	93
好きなアーティストや作曲家について調べる	230	214	157	100
作曲、編曲をする	600	57	21	22
ある音楽を好きになるとそのジャンルの音楽をいろいろ聞いてみる	96	193	172	240
友人と音楽のことについて話す	82	252	192	175

Table 9 音楽行動全般に対する興味、態度と各聴取傾向との関係（ピアソンの相関係数）

質問項目	気分優位的聴取傾向	活動随伴的聴取傾向
カラオケで歌う	-.021	-.022
家で楽器の練習をする	.015	.014
家で歌の練習をする	-.005	-.024
音楽に関する書籍を読む	.011	.016
好きなアーティストや作曲家について調べる	-.006	-.004
作曲、編曲をする	.018	-.004
ある音楽を好きになるとそのジャンルの音楽をいろいろ聞いてみる	-.018	-.025
友人と音楽のことについて話す	-.036	-.034

まとめと今後の課題

本研究は、日常生活における音楽聴取行動から、その背後にある音楽聴取傾向を量的に抽出することを第1の目的とした。因子分析の結果、気分状態に依存して、あるいは気分変化を目的として音楽を聴取する気分優位的聴取傾向と、何らかの活動とともに音楽を聴取する活動随伴的聴取傾向があることがわかった。抽出された2つの聴取傾向の間の相関が高いことから、音楽聴取傾向は、一方が強ければ一方が弱いというように相対するものではなく、個人内に2つの聴取傾向が存在し、それぞれの聴取傾向の程度が、音楽聴取行動の個人差を生み出すと考えられる。

また、第2の目的は、それぞれの音楽聴取傾向が、音楽に関連する個人の特徴とどのように関連するかを調べることであった。音楽の聞き方や聴取時の状態、音楽聴取に対する態度、一日の音楽聴取の時間、音楽聴取に使用するメディア、聴取以外の音楽行動に対する興味や態度といった様々な側面とそれぞれの聴取傾向との関係について調べた結果、関係が認められたのは、音楽の聞き方や聴取時の状態のみであった。音楽の聞き方や聴取時の状態については、聴取傾向により相関係数の大きさが有意に異なっており、気分優位的聴取傾向との関連性がより強いことが示唆された。この結果については、質問項目の内容と聴取傾向の特性の関係から説明が出来るであろう。すなわち、これらの質問項目は音楽をどの程度集中、または没頭して聴取するかを反映する項目であった。気分優位的聴取傾向は、気分的側面に焦点を当てて音楽を聞くため、例えば「音楽を聞くときには音楽を聞くことだけに集中している」必要があると思われる。また、「音楽を聞いているときに音楽の持つ世界と一体感を感じる」ことも多いであろう。しかし、活動随伴的聴取傾向は、何らかの活動と同時に音楽を聞く傾向であり、集中して音楽を聞いていると、同時に行っている活動の遂行に支障をきたすため、これらの項目との相関関係は気分優位的聴取傾向に比べ低かったものと思われる。

本研究では、聴取時の気分状態や気分変化を目的に音楽を聴取する傾向を気分優位的聴取傾向としたが、この聴取傾向を測定する質問項目の中には、異なる性質の気分（気分を高揚させたいとき、泣きたい気分のとき、等）が一緒に含まれている。しかし、音楽聴取傾向について気分という大きなまとまりで捉えるよりも、例えば、悲しいとき、落ち込んでいるとき、泣きたい気分のときに、沈んだ気持ちを解消するために音楽を聞くことと、やる気がしないとき、気分を高揚させたいとき、気分が乗らないときに、気持ちを高揚させるために音楽を聞くこととを区別して、感情の質の違い

を問題とする方が適切であるかもしれない。従って、今後は気分優位的聴取傾向の下位の聴取傾向を検討するための方法を考案する必要がある。それにより、個人の音楽聴取行動と聴取傾向の関係について、より詳細に検討することが出来ると思われる。

引用文献

- 石川弘義・岡本奎六・戸口幸策・山中正剛・山本真理子 1985 音楽経験の影響に関する一考察
—音楽経験と心理的特徴との関係について— 成城学園教育研究所教育研究年報, 8, 152-169.
- 岩城達也・田中秀樹・堀 忠雄 1999 就寝時の音楽利用に関する探索的調査 日本バイオミュージック学会誌, 17, 200-209.
- Lehmann, A. 1997 Research note: Affective response to everyday life events and music listening. *Psychology of Music*, 25, 84-90.
- Sloboda, J. 1999 Everyday uses of music listening: A preliminary study. In S. W. Yi (Eds.), *Music, mind, and science*. Seoul: Seoul National University Press. Pp. 354-369.
- Sloboda, J., & O'Neill, S. 2001 Emotions in everyday listening to music. In P. N. Juslin, & J. A. Sloboda (Eds.), *Music and emotion: Theory and research*. New York: Oxford University Press. Pp. 415-429.
- Sloboda, J., O'Neill, S., & Ivaldi, A. 2001 Functions of music in everyday life: An exploratory study using the Experience Sampling Method. *Musicae Scientiae*, 5, 9-32.

謝辞

本研究の質問紙作成の際には、広島大学教育学研究科の深田博己先生に貴重なご助言を賜りました。深く感謝申し上げます。また、調査の実施にご協力をいただきました各大学の先生方、及び学生の皆様に心から感謝の意を表します。